

◆ 主な研究課題・事業 ◆

課題1 オウトウのウメシロカイガラムシに対する効率的な防除技術の確立

オウトウの枝幹性害虫であるウメシロカイガラムシは本県では5月と8月に発生しますが、第2世代の発生時期は越冬世代に比べ長期にわたり年次間差も大きいことから生産現場では防除に苦慮しています。

そこで、ウメシロカイガラムシの第2世代の発生時期及び防除適期を明らかにするとともに、近年、ハダニ類の新たな防除薬剤として利用されている気門封鎖剤の活用を含めた、効率的・効果的な防除法について検討します。



ウメシロカイガラムシ雌成虫

課題2 ハウスオウトウ病害虫の総合防除体系の確立

ハウスオウトウ栽培は、雨よけ栽培と比較し生育期間が長く、病害虫の発生消長も異なるため、防除の判断が難しく、褐色せん孔病の多発により黄変落葉の被害が発生しています。

本試験では、ハウスオウトウ栽培における褐色せん孔病の発生実態から防除適期を明らかにするとともに、効率的・効果的な防除体系を検討しています。



オウトウ褐色せん孔病の被害葉

課題3 オウトウオリジナル新品種「山形C12号」の大玉生産に向けた肥培管理技術の確立

本県オリジナルオウトウ新品種「山形C12号」(やまがた紅王)は従来の品種よりも果実肥大に優れることが特徴で、市場や生産者から大きな期待がよせられています。

そこで、大玉品種という特性を十分に発揮できるように、4Lサイズ以上の果実割合を高めるための肥培管理として、春施肥の効果を検討します。



春施肥の圃場試験

課題4 ライシメータによる果樹園土壤養水分の数値化

施肥による肥料成分の溶脱量を減らすことは、農業による環境負荷低減のために重要です。そこで、土壤溶液を地下から採取できる「ライシメータ」を活用し、おうとう栽培における養水分の収支（水と肥料成分の挙動）を明らかにします。データを集積し、高品質おうとう生産に向けた灌水技術や堆肥等有機物を含めた肥培管理技術について検討します。

本年度は春施肥を行うことで、おうとうの養水分収支、樹体の栄養状態、果実品質に及ぼす効果を調査します。



ライシメータ（土壤溶液採取装置）